

社会語用論的語史研究とはなにか？

—社会コミュニケーションとしての 語史に関する一考察—*

細川 裕史

「聖書における天地創造の物語によれば、人間による最初の言語行為は命名である。(…)聖書が伝えるこの人間の言語行為もまた、対話的である」(Jörg Kilian 2005: 1)

1. はじめに

はるか古代につくられた遺跡に入り、テキストの断片が書き記された粘土板を発見したとしよう。われわれの手元には、そこに記された言語しかない。誰が誰に宛てて何の目的でそれを書いたのかという情報はすでに失われて、永久に分からないということもあるだろう。しかし、どの時代に書かれたテキストであれ、いずれかの書き手がいずれかの読み手のために、なんらかの意図を持ってそれを書いたはずである。なぜなら、言語はつねに受け手と社会的な現象を伴うものであり、¹⁾ 言語行為は社会コミュニケーションのひとつだからである。

Klaus J. Mattheierによれば、社会の変遷と関連付けながらドイツ語史を記述するという立場は、すでに20世紀初頭からあった。しかし、いまだに多くの語史研究者が、語史記述とは（音韻論や語彙研究、文法論を通

*この論文は、日本学術振興会特別研究員制度PDの支援を受けて書かれた。また、日本独文学会2008年秋季研究発表会での発表内容に加筆修正したものである。

1) Vgl. Eggers, Hans (1963): Deutsche Sprachgeschichte. Bd.1. Hamburg: Rowohlt. S.11.

じて) 言語体系の変遷を記述することだとみなしており、語史研究の課題は、統一的な国家言語や標準語がいかにして成立し普及したかを記述することであるとされている。しかし、いわゆる「語用論的転回」以降、1980年頃から、ドイツ語史研究の分野においても、言語を社会的な行為としてとらえ、言語の変遷を社会コミュニケーションの歴史の一部として考察する、という研究が注目を集めている。語史研究への語用論的な視点の導入を主張した最初期の論文としては、Cherubim (1984) が挙げられる。²⁾ こうした研究は「社会語用論的語史 (die soziopragmatische Sprachgeschichte)」³⁾ 研究と呼ばれており、この分野では、語史研究の「本来の」対象である言語体系の歴史だけでなく、広義の語史に含まれる「外的」語史 (言語体系の変遷と関連する言語外の要因の変遷) も研究の対象となっている。⁴⁾

上述の Mattheier の指摘にもあるように、ドイツにおいても未だにこの新しい研究分野は語史研究における主流派となるには至っていない。一方、日本においても、後述するように個々の語史研究に際して社会語用論的な視点を取り入れている例はあるが、社会語用論的語史研究そのも

2) Vgl. Cherubim, Dieter (1984): Sprachgeschichte im Zeichen der linguistischen Pragmatik. In: Steger, Hugo/ Wiegand, Herbert Ernst (Hg.): Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Sprachgeschichte. Bd.2.1. Berlin/ New York: de Gruyter, 802-815. S.810.

3) Mattheier, Klaus J. (1998): Kommunikationsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Überlegungen zum Forschungsstand und zu Perspektiven der Forschungsentwicklung. In: Cherubim, Dieter u.a. (Hg.): Sprache und bürgerliche Nation. Berlin/ New York: de Gruyter, 1-45. S.2; Polenz, Peter von (2000): Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Bd.1. 2. Aufl. Berlin/ New York: de Gruyter. S.12f. Mattheier (1998) によれば、この名称の主な提唱者は Peter von Polenz と Dieter Cherubim である。また、「ドイツ語コミュニケーション史」(die Kommunikationsgeschichte des Deutschen) や「社会コミュニケーション的語史」(die soziokommunikative Sprachgeschichte) という名称も、「社会語用論的語史」と同様に、社会的な行為としての言語の歴史を指す術語である。しかし、筆者は、「社会語用論的語史」という名称がこの分野をもっとも明瞭に表現していると考え、本論では一貫してこの名称を用いる。

4) Vgl. Mattheier (1998) S.1f.; Mattheier, Klaus J. (1999): Sprachhistoriker als Soziologen. Über sprachwissenschaftliche Versuche zur Strukturierung sozialer Gemeinschaften. In: Gardt, A./ Haß-Zumkehr, U./ Roelcke, T. (Hg.): Sprachgeschichte als Kulturgeschichte. Berlin/ New York: de Gruyter, 11-18. S.16.

のについては、あまり知られていない。そこで本論では、近年ようやく行われ始めまだ十分には普及していないこの研究分野を、「外的」語史の研究を中心に考察し、その問題点と可能性について論じていく。

2. 社会語用論的語史研究

「社会語用論的な」語史研究を、Peter von Polenz は、特定の社会集団が使用していた言語変種を社会言語的に扱うのみならず、歴史上のある時点で行われた言語行為を語用論的に考察する分野、と位置づけている。この社会語用論的語史研究が目指すのは、言語の歴史を言語使用者と密接に関連付けながら記述すること、つまり、特定の条件下における個人の社会的な行動を通じて、特定の社会集団がおかれていた言語状況を解明していくことである。⁵⁾

2.1. 社会語用論的語史研究で扱われるテーマ

語用論的な視点を取り入れた語史研究とそれ以前の語史研究とでは、具体的にどのような相違があるのだろうか。Cherubim (1984) では、「これまでの語史」に欠けていた「語用論的な語史」の特徴として、以下の6点が挙げられている。⁶⁾

- a) 標準語だけでなく、さまざまな言語変種を扱う
- b) 言語の統一化だけではなく、言語の多様化の歴史も扱う

5) Vgl. Polenz (2000) S.13f.; Elspaß, Stephan (2005): Sprachgeschichte von unten. Untersuchungen zum geschriebenen Alltagsdeutsch im 19. Jahrhundert. Tübingen: Niemeyer. S.12, 16.

6) Vgl. Cherubim (1984) S.808ff.

- c) 書きことばだけでなく、話しことばも扱う
- d) 言語を、歴史的条件下（社会・文化・概念史）における人間の社会行動として扱う
- e) 言語の歴史を現代の視点からみているということを、つねに意識する
- f) 大まかな言語の発展ではなく、よりコンパクトなあるいは複合的な事象を考察する
 （18世紀の市民社会の発展、19世紀の産業化、20世紀のマスメディアの発展など）

また、von Polenz (2000) は、この分野における先行研究では「統一性 (Einheitlichkeit)」ではなく「可変性 (Variabilität)」と「対立 (Gegensätzlichkeit)」に焦点が当てられているとして、以下のような研究テーマを紹介している。⁷⁾

- a) 書きことば性 vs. 話しことば性
- b) „spontan“で感情的な言語 vs. 理性的で標準化された言語、
 個人的な言語 vs. 社会的・集団的な言語、私的な言語 vs. 公的な言語
 （日常語・„Umgangssprache“と標準語・„Hochsprache“の差異など）
- c) 一般的な言語 vs. 特殊な言語
 （共通語と専門語・学者ことば・政治家ことば・文学語など）
- d) 上層階級の言語 vs. 下層階級の言語
 （教養語、社会方言、ジャルゴンなど）
- e) 局地的・地域的な言語 vs. 超地域的な言語
 （地域方言、都市語、統一語など）

7) Vgl. Polenz (2000) S.12f.

f) 言語の社会的・国家的な情勢

(複数国家にまたがる言語の国家ごとの差異など)

g) ドイツ語 vs. 他言語

(バイリンガリズム、ダイグロシア、言語接触、借用語など)

一方、近年の語史研究で扱われている具体的な研究対象として、von Polenz は、学校教育制度や識字率、世俗・消費文学 (Trivial- oder Konsumliteratur)、書籍の出版状況、言語の地域差、ドイツにおける少数言語の使用者などを挙げている。⁸⁾ こうした記述からは、この分野では主に社会言語学的なテーマが注目されているのではないか、という印象を受ける。その原因は、社会語用論的語史研究が扱う対象の範囲に求められるのではないだろうか。この分野では、言語の歴史を言語外の要因と結びつけ、コミュニケーション全体を研究の対象としている。そのためには、たとえば社会と言語の橋渡し役であるメディアや教育の歴史を考察しなければならないし、社会コミュニケーションにかかわる技術的・制度的な条件の変遷も考察しなければならない (言語政策、識字率、読書習慣など)。⁹⁾ こうした理由から、この分野における語史研究は、個人の言語行動 (発話行為や会話など) の分析を最終目標とした研究であっても、出発点として言語行動の背景となる社会言語学的なテーマを選ばざるをえないのだろう。

2.2. 歴史社会言語学

社会語用論的語史研究に社会言語学の視点から貢献するために発展した分野が、歴史社会言語学である。¹⁰⁾

8) Vgl. Polenz (2000) S.15ff.

9) Vgl. Polenz (2000) S.9ff.

10) Vgl. Elspaß (2005) S.14.

「歴史社会言語学」という名称は用いられていないにしても、社会学的な視点からの語史記述は、社会語用論的語史研究が提唱される以前から存在していた。ドイツ語史の記述に際して、初めて明確に社会学的な視点を持ち込んだのは、Hans Eggers (1963) である。¹¹⁾ 彼はその著書の中で、「交際共同体 (Verkehrsgemeinschaft)」という概念を提示した。これは、互いに交流のある人々の集団を指し、もっとも小さな「交際共同体」は家族であるが、日常的な小さなものだけではなく、西方教会などの超国家的で大規模な「交際共同体」も存在する。こうした「交際共同体」は、日々の交際を通じてそれぞれの言語を形成し、その集団の規模や集団の指導者層の立場（政治家、宗教家、思想家など）によって、そこで形成される言語の文化的な価値が決まる（方言、日常語、文化語など）¹²⁾。彼はドイツ語史を記述する際に、その時代ごとに主導的な立場にあった共同体（中世における騎士階級、近代におけるブルジョア階級など）を中心に扱っており、（文化的な価値が低いとみなされていた）大多数の小さな共同体や、社会構造全体の発展については、明確には触れていない。この、特権的な立場にある社会集団とその言語にもっぱら関心をそそぐという傾向は、歴史社会言語学が現在まで抱えてきた問題である。

社会語用論的語史研究は、上層階級の文化や突出した事績のみではなく、非特権階級に属する言語使用者がおかれていた言語状況をも扱うものである。¹³⁾ しかし、教養のある一部の少数派が使用していた上層階級の言語と比べ、下層階級の言語に関する研究はまだ十分には行われていない、と Stephan Elspaß は指摘する。また、たとえば下層階級に属する書き手（農民や労働者など）の言語が学校文法からみてどんな「誤り」をおかしているかを調査するなど、下層階級の言語を考察する研究者が「上層階級からの視点」にとらわれている、という点を彼は危険視してい

11) Vgl. Mattheier (1999) S.16.

12) Vgl. Eggers (1963) S.12ff.

13) Vgl. Polenz (2000) S.13.

る。¹⁴⁾

そもそも Elspaß は、言語を社会集団・共同体ごとに一般化するという研究方法そのものに対して、批判的な立場をとっているのである。Eggers が行った社会学的な語史記述と同様に、これまでの社会言語学の実分野における研究では、「上層階級の言語と下層階級の言語」や「教養層と非教養層」といった二分化や、「教養市民の言語」や「労働者の言語」といった社会集団ごとの一般化が行われてきた。しかし、農家の中にも教養意識の高い有資産農家があったように、特定の社会集団に属する人々の間にも個々人の言語能力に幅があるため、Elspaß は、社会集団ごとに一般化して分類するのではなく、書き手個人の「識字率・教養レベル」を基準とした分類を行うべきだと主張している。¹⁵⁾ 彼の提言は、この分野において無批判に行われてきた言語の一般化に警鐘をならすという点では評価に値するが、しかしながら、とりわけ彼が必要性を強調する下層階級の言語を研究する際には、この分類法の実用性を疑問視せざるをえない。というのも、伝記などを通じて、どのように読み書きを行っていたのかが詳細に分かっている書き手でもなければ、その人物の「識字率・教養レベル」は明確には分からない。また、たとえば、原則的に匿名で執筆するジャーナリストの言語を分析する場合などには、彼の分類はまったく利用できない。ただし、彼の提言は社会言語学に語用論的な視点を取り入れようとするものであり、彼の提唱する歴史社会言語学は、社会語用論的語史研究の社会言語学的な側面だけでなく、語用論的な側面をも配慮したものとみなすことができるだろう。

2.3. 歴史会話研究

社会語用論的語史研究の語用論的な側面により焦点をあてた研究のひ

14) Vgl. Elspaß (2005) S.15f.

15) Vgl. Elspaß (2005) S.41, 44ff.

とつとしては、Jörg Kilianらの歴史会話研究 (historische Dialogforschung) が挙げられる。会話研究は一般に語用論に分類されるものだが、Kilianは、過去に行われた会話を研究する際には「言語構造」「語用論」「社会言語学」の3つの次元から会話を考察しなければならないと主張しており、これは von Polenzの標榜する社会語用論的語史研究の理念と軌を一にしている。Kilianは、社会語用論的語史記述を、過去に行われた会話の語用論的な価値判断に不可欠な社会言語学的なデータを提供するものとして位置づけており、実際に、彼の研究では、「請願する」「挑発する」「尋ねる」などといった言語行為の歴史を考察する際に、その言語構造と発語内行為だけでなく、言語使用者の所属する社会集団と制度 (騎士と宮廷、法律家と裁判所など) の変遷も考慮されている。¹⁶⁾ しかし、本来は語用論的な側面が強いはずの歴史会話研究の分野においても、近年では、会話そのものよりも言語外の歴史 (文化史、社会史など) を包含した広義における語史の、社会言語学的な研究に関心が移りつつある。¹⁷⁾

3. 「外的」語史

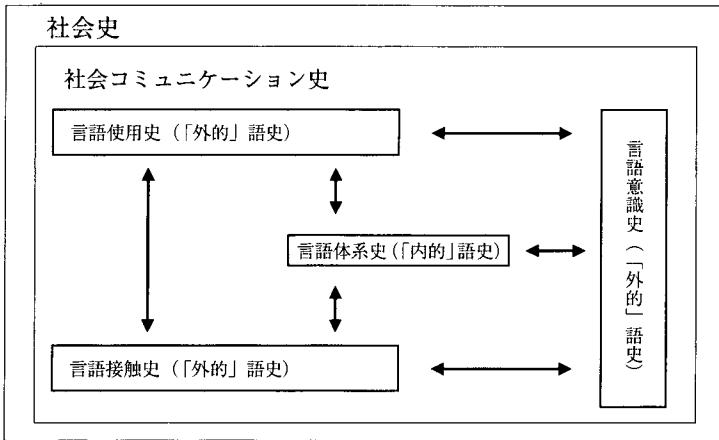
社会語用論的語史研究の分野では、言語体系の変遷を「内的」語史と呼び、社会史 (日常史、教育史、メンタリティ史など) を含めた広義における語史のうち言語体系の変遷以外のものを「外的」語史と呼び分けている。Mattheierは、この「外的」語史を3つの分野に分類している。それは、社会状況の変化と言語変種・文体の変遷を扱う言語使用史 (Sprachgebrauchsgeschichte)、ドイツ語と他言語との接触を扱う言語接触史 (Sprachkontaktgeschichte)、コミュニケーションに関するメンタリ

16) Vgl. Kilian, Jörg (2005) : Historische Dialogforschung. Tübingen: Niemeyer. S.12ff, 22, 106f., 130.

17) Vgl. Kilian (2005) S.36.

ティの変遷を扱う言語意識史 (Sprachbewusstseinsgeschichte) である。¹⁸⁾ これらの語史は、それぞれ「内的」語史と密接に関連しているだけでなく、以下に述べるように、「外的」語史どうしても互いに結びついている。そのため、社会語用論的語史研究を行う際には、扱う対象や研究方法に応じて「内的」語史および「外的」語史の3分野のどこに焦点を当てるかを変える必要があるが、いずれの分野をも考慮して研究しなければならない。この分野で扱われる対象をまとめると、図表1のようなになる。

図表1：社会語用論的語史研究の対象¹⁹⁾



3.1. 言語使用史

言語使用史は、社会集団や個々の行為者、行動の意図などと言語との関わりを考察する分野である。²⁰⁾ この分野における研究としては、「印刷業者の言語」に注目した藤井明彦 (1990) を挙げることができる。この

18) Vgl. Mattheier (1998) S.1f., 8f.; Elspaß (2005) S.16f.

19) Vgl. Mattheier (1998) Abb.1.

20) Vgl. Elspaß (2005) S.27.

論文では、初期新高ドイツ語時代の印刷術・印刷メディアの状況と言語体系の変遷とが関連付けて考察され、「Frñhd.期の印刷業者の言語が共通語形成過程において促進的な役割を果たしたことを否定するのは、極めて困難である」と結論付けられている。²¹⁾

この分野では、「一般的な言語」と「特殊化された言語」との（おもに語彙レベルでの）差異が中心的に扱われている。ここでいう「一般的な言語」とは、ある言語集団の平均的な構成員が共通の知識に基づいて使用できる言語変種のことであり、「特殊化された言語」とは語彙やテキストの雛形を通じて特定の集団・制度と結びついた言語変種（職業語や専門語など）のことである。²²⁾「特殊化された言語」としては、Eugenio Coseriuの「立方体 (Diasystem)」モデルにそったカテゴリーごとに、多様な言語変種が扱われている。このモデルによれば、原理的には、言語は「地域層の (diatopisch)」側面（地理に関する変種＝地域方言）、「社会層の (diastratisch)」側面（社会文化に関する変種＝社会方言・集団語）、「文体層の (diaphasisch)」側面の3つに分けることができる。もっとも、それぞれの側面は互いに重なりあっており、地域方言にも社会層や文体層における違いがみられ、文体にも地域層や社会層における違いがある。Mattheierは、このような多側面にわたる変種のうち社会層と文体層とにまたがるものを特に重視し、この分野で扱われる変種を以下の4つに分類している。²³⁾

- a) 地域層における変種（ドイツ国外のドイツ語、都市／地域のドイツ語など）
- b) 社会層における変種（貴族の言語、ブルジョアの言語、労働者の

21) 藤井明彦 (1990) : 「初期新高ドイツ語期の印刷術と印刷業者 - A. Schirokauer の『遺産』をめぐって -」日本独文学会『ドイツ文学』84号、22-38、32頁参照。

22) Vgl. Elspaß (2005) S.35.

23) Vgl. Coseriu, Eugenio (1973) : Einführung in die strukturelle Betrachtung des Wortschatzes. 2. Aufl. Tübingen: Narr. S.32; Mattheier (1998) S.18ff.

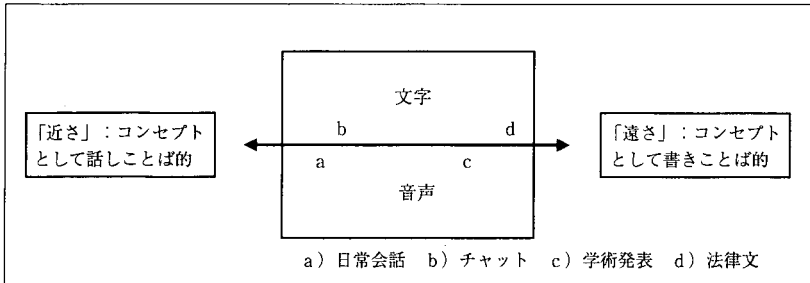
言語など)

- c) 社会・文体層における変種（若者ことば、学生ことばなど）
- d) 文体層における変種（専門語、文学語、ジャーナリストのドイツ語など）

ドイツ語圏では、産業の発展や人口の都市への流入などにもない、19世紀に多様な社会集団や制度が成立した。そのため、この分野では、(「上層」階級の代表としての)「教養市民」や(「下層」階級の代表としての)「労働者」などの社会集団や、「請願」などの制度に特有の言語使用を対象とした、社会層と文体層における変種がおもに扱われている。²⁴⁾

一方で、19世紀に関してもまだ十分な研究が行われていないのは、メディアとしての「書きことば／話しことば」(文字コード／音声コード)の差異である。²⁵⁾ 19世紀は公的な場面における書きことばの全盛期であり、この時代の書きことば(古典派作家の言語など)についてはすでに

図表2：Koch/Oesterreicherの「近さ—遠さ」モデル (一部改)²⁶⁾



24) Vgl. Mattheier (1998) S.20; Elspaß (2005) S.35, 40ff. ただし、Elspaßは、19世紀に職業や制度ごとに語彙が特殊化していったことを認めつつも、人口の大半はいぜん農業か手工業に従事していたことを指摘している。

25) Vgl. Mattheier (1998) S.20.

26) Vgl. Koch, Peter/ Oesterreicher, Wulf (1994) : Schriftlichkeit und Sprache. In: Steger, Hugo/ Wiegand, Herbert Ernst (Hg.) : Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Schrift und Schriftlichkeit. Berlin/ New York: de Gruyter, 587-604. S.588.

研究がすすんでいる一方で、この時代の話しことばについてはようやく手が付けられたばかりである。²⁷⁾ また、メディアとしての「書きことば／話しことば」の差異のみではなく、このテーマに関しては、Peter KochとWulf Oesterreicherによって「近さ—遠さ (Nähe-Distanz)」モデルが示されて以降は、コンセプトとしての「書きことば／話しことば」にも関心が寄せられている (図表2参照)。

このモデルは、メディアとしての「書きことば／話しことば」と同時にコンセプトとしての「書きことば／話しことば」をも示すものであり、Koch/Oesterreicherは、コンセプトとしての「書きことば／話しことば」を「遠さ」と「近さ」を両極におく連続体として表した。²⁸⁾ Johannes Schwitallaは、このモデルによりながら、「遠さ」と「近さ」を以下のよう
に定義している。「遠い」コミュニケーションとは、「参加者同士が空間的に (電話など) あるいは空間的・時間的に (手紙など) 隔てられている」、「参加者同士が知り合いではない」、「前もって決められたテーマや目的のために行われる (制度上の相互行為など)」、「聴衆のまえで公的に行われる」²⁹⁾ コミュニケーションであり、この「遠い」度合いが高ければ高いほど言語は「書きことば的」になる。一方の「近い」コミュニケーションとは、「対面した相手と行う」、「相手と親密であり感情表現や „Spontaneität“ が許されている」、「対象物を指し示すことができる空間を共有している」³⁰⁾ コミュニケーションであり、「近い」度合いが高ければ高いほど言語は「話しことば的」になる。つまり、コンセプトとしての「書きことば／話しことば」は、二分割されたものではなく、この「遠さ」と「近さ」の間を状況に応じて段階的に書きことば的になったり話しこ

27) Vgl. Polenz, Peter von (1999): Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Bd.3. Berlin/ New York: de Gruyter. S.37; Elspaß (2005) S.24.

28) Vgl. Koch/Oesterreicher (1994) S.587ff.

29) Schwitalla, Johannes (2006): Gesprochenes Deutsch. 3. Aufl. Berlin: Erich Schmidt. S.21f.

30) Schwitalla (2006) S.21.

とば的になったりするのである（たとえば、同じ「手紙」メディアで使用される言語でも、相手のことをよく知っていればより話しことば的になり、公的な内容であればより書きことば的になる）。³¹⁾「近さ—遠さ」という概念は普遍的なものであり、歴史上のある時代を対象とした「書きことば／話しことば」研究にも用いることができるが、どのような言語的特徴が「遠い・書きことば的」「近い・話しことば的」とみなされていたのかといった、語用論的な価値付けは時代ごとに変化しているため、語史研究に際しては個々に検証する必要がある。³²⁾ こうした検証にとって有用な資料となるのが、それぞれの時代に書かれ普及していた辞書や辞典である。たとえば、高田博行（2007）では、アーデルングの『高地ドイツ語方言の文法的・批判的辞典』（1793-1801）における言語の語用論的価値に関する記述が考察されており、「アーデルングには今日の談話分析の概念を先取りしていると言える点が多くみられる」³³⁾と指摘されている。

語史研究における「近さ—遠さ」に関しては、Eggersによる方言と文化語の考察のように、日常語と„Hochsprache“との差異が注目されている。³⁴⁾ ドイツ語圏では、1800年ごろに統一的な文章語である„Hochsprache“が成立したが、それらは特権階級に属する教養市民層や貴族階級によってのみ積極的に使用されていた変種であり、19世紀においてもまだ標準語と呼べるほど浸透してはいなかった。³⁵⁾ それにもかかわらず、上述したように、これまでの語史研究では、大多数の言語使用者にとっては「遠いことば」であった„Hochsprache“がもっぱら研究対象とされており、「近いことば」である日常語（日常的な社会コミュニケーションの範囲内で使用

31) Vgl. Schwitalla (2006) S.20f.

32) Vgl. Elspaß (2005) S.26f; Kilian (2005) S.68.

33) 高田博行 (2007) : 「歴史語用論の可能性—甦るかつての言語的日常」『月刊言語』12月号、68-75、73頁。

34) Vgl. Eggers (1963) S.14ff.

35) Vgl. Schmidt, Wilhelm (1996) : Geschichte der deutschen Sprache. 7. Aufl. Stuttgart: Hirzel. S.133f.; Mattheier (1998) S.19; Elspaß (2005) S.50.

される方言や俗語など)は、これまで積極的には扱われてこなかった。³⁶⁾ こうしたことへの反省から、近年では幅広い社会層によって日常的に用いられていた「近いことば」研究に、関心が移りつつある。

3.2. 言語接触史

言語接触史の分野では、以下のようなテーマごとにドイツ語と他言語との接触が扱われている。このうち、19世紀を対象とした研究においてももっとも注目されているのは、「言語の境界における言語接触」、「ドイツ語圏における少数派言語」、「ドイツ語一般に対する外国語の影響」である。³⁷⁾

- a) 言語の境界における言語接触
- b) 多言語が使用される状況
 - b 1) ドイツ語圏における少数派言語 (ソルブ語など)
 - b 2) 非ドイツ語圏におけるドイツ語母語話者 (北米へのドイツ移民など)
- c) ドイツ語一般に対する外国語の影響 (言語浄化運動など)
- d) 非ドイツ語圏におけるドイツ語
(デンマーク統治下のシュレースヴィヒにおけるドイツ語など)
- e) ドイツ国内における外国語
(プロイセンにおけるオランダ語など)

「言語の境界」に関しては、ある時代における特定の地域だけでなく、特定のメディアやテキスト種を扱うこともできるだろう。たとえば、Elspaß (2005) では、19世紀における日常語研究のための数少ない資料のひとつとして、北米への移民がドイツにいる親族に宛てて書いた手紙

36) Vgl. Elspaß (2005) S.28ff.

37) Vgl. Mattheier (1998) S.21.

を挙げているが、こうした手紙においては語彙的・統語的な次元において英語との「言語接触現象」がみられる（英語からの借用語や枠外配置など）。³⁸⁾ また、マスメディアになりつつあった19世紀の新聞も、「言語の境界」と言えるだろう。当時の新聞メディアはフランスやイギリスの新聞を模範としており、また電信技術の発展とともにますます海外発（パリやロンドンから）のニュースが新聞記事の重要な構成要素となっていたため、外国語の影響をつよく受けていたからである。³⁹⁾ ただし、移民の書いた日常的な手紙や新聞の言語を対象として「言語接触現象」を調査する場合には、「移民」や「ジャーナリスト」といった社会集団および「手紙」や「新聞」といったメディア特有の言語使用についても考察しなければならない。このように、言語使用史と言語接触史とは、密接な関連性を持っているのである。

3.3. 言語意識史

言語意識史の分野では、コミュニケーションに関するメンタリティ、考え方、理論の変遷が扱われる。この分野における研究としては、「初期新高ドイツ語時代」の人々と「現在の我々」との「言語に関する規範意識」の違いに注目した新田春夫（1990）を挙げることができる。この論文では、当時は現代ほど共通語のもつ規範性は浸透していなかったことや、言語規範に対する意識には社会階層ごとに大きな違いがあったことなどが指摘されている。⁴⁰⁾

特定の時代における言語に対する考え方や取り組み方は、言語の発展

38) Vgl. Elspaß (2005) S.52ff.

39) Vgl. Wuttke, Heinrich (1875): Die deutschen Zeitschriften und die Entstehung der öffentlichen Meinung. 3. Aufl. Leipzig: Krüger. S.77, 176f.; Koszyk, Kurt (1966): Deutsche Presse im 19. Jahrhundert. Berlin: Colloquium. S.212, 219f.; Straßner, Erich (1999): Zeitung. 2. Aufl. Tübingen: Niemeyer. Kap.10.

40) 新田春夫 (1990): 「多様性と規範性－初期新高ドイツ語時代の社会状況と言語意識－」日本独文学会『ドイツ文学』84号、11-21. 11f, 18頁参照。

に対して大きな影響を及ぼしているに違いないが、しかしながら、社会語用論的語史研究における他の分野に比べ、この分野は研究が進んでいない。⁴¹⁾ それは、Mattheierが「言語意識史」を「いくぶん漠然とした概念」⁴²⁾と呼んでいるように、言語使用史や言語接触史などくらべる研究対象が具体的ではない、ということに原因があると思われる。

Mattheier (1998)はこの分野を「言語に対する考察」を扱う分野とし、これまで「ドイツ語に対する専門的な考察」については扱われてきたが、「ドイツ語の言語変種や文体に対する日常の意識」についてはわずかな研究しかされていない、としている。彼は、「専門的な考察」の例としては、歴史上の文法家によるドイツ語研究に関するメタ研究などを挙げる一方で、「日常の意識」については、一例としてAngelika Linke (1996)の「メンタリティ史 (Mentalitätsgeschichte)」研究を挙げている。⁴³⁾ このように、Mattheier (1998)では「言語意識史」と言語に関する「メンタリティ史」という2つの術語は明確には区別されていないが、私見によれば、これらの術語は使い分ける必要があるように思われる。たとえば、Linkeが自らの研究の焦点を、「実際の言語使用」よりも「言語使用の規範」におくと宣言しているように、言語に関する「メンタリティ史」研究においては、その時代における「言語に対する考察」全般ではなく、その時代においてはどのような言語使用が「適切」で「上品」だとされていたのかといった、「言語に関するマナー」がもっぱら扱われているからである。⁴⁴⁾

言語に関する「メンタリティ史」と「言語意識史」との違いについては、Joachim Scharloth (2005)において明確な区分が行われている。「メ

41) Vgl. Hermanns, Fritz (1995): Sprachgeschichte als Mentalitätsgeschichte. In: Gardt, Andreas (Hg.): Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen. Tübingen: Niemeyer, 69-101. S.79f.; Mattheier (1998) S.22f.

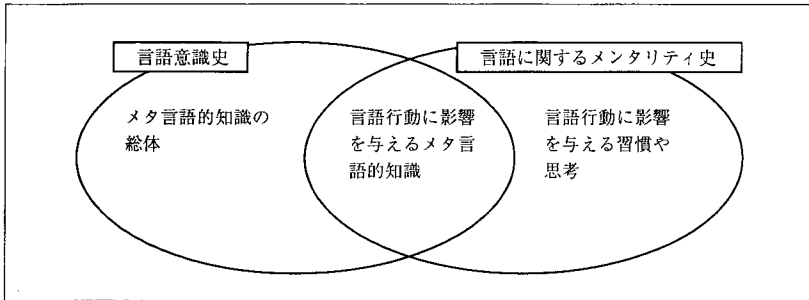
42) Mattheier (1998) S.22.

43) Vgl. Mattheier (1998) S.22.

44) Vgl. Linke, Angelika (1996): Sprachkultur und Bürgertum. Zur Mentalitätsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Stuttgart/Weimar: Metzler. S.36.

「メンタリティ史」研究における「メンタリティ」という術語に関して彼は、Fritz Hermanns (1995) の「ある社会集団がもつ考えること、感じること、したいと思うこと、すべきと思うことに関する習慣および構想の総体」⁴⁵⁾ という定義を用いている。この「メンタリティ」は、言語行動にも影響を与えるものであり、したがって、言語に関する「メンタリティ史」を研究することは、言語行動の変遷を解釈する際に有用である。⁴⁶⁾ 一方の「言語意識」を、Scharloth は「ある個人あるいは（実体化された）ある集団のメタ言語的知識の総体」⁴⁷⁾ と定義している。彼によれば、言語に関する「メンタリティ史」は言語行動に影響を与えている習慣や思考の雛形を（意識されないものも含めて）扱う分野であるのに対して、「言語意識史」は言語に関して意識的に行われた思考の内容すべてを扱う分野である。⁴⁸⁾ つまり、両分野の中間領域として、言語行動に影響を与えるメタ言語的知識という領域が存在することになる（図表3参照）。マナー本などに基づいて「言語に関するマナー」を考察した上述の Linke (1996) な

図表3：言語意識史と言語に関するメンタリティ史の領域



45) Hermanns (1995) S.77.

46) Vgl. Hermanns (1995) S.76.

47) Scharloth, Joachim (2005): Sprachnormen und Mentalitäten. Sprachbewusstseinsgeschichte in Deutschland im Zeitraum von 1766 und 1785. Tübingen: Niemeyer. S.19.

48) Vgl. Scharloth (2005) S.46, 50.

どは、この領域を対象とした研究といえるだろう。

Scharloth (2005) においては、「言語意識」がより詳細に区分されている (図表 4 参照)。言語意識は、「錯綜した (verworren) 認識」である「前学問的なメタ言語的付随意識 (das vorwissenschaftliche metasprachliche Begleitbewusstsein)」、 「非十全な (inadäquat) 認識」である「日常的な言語意識」、 「十全な (adäquat) 認識」である「学問的な言語意識」という 3 つの形成段階に区分される。⁴⁹⁾ 後世に資料 (文法書、辞書、マナー本など) として伝わりやすいのは、十全に認識されている言語意識であるが、それらの資料に記述された「学問的な言語意識」のみが研究対象となりうるわけではない。というのは、そこには (文法家らの) 「日常的な言語意識」が反映されており、また文法書や辞書における「学問的な言語意識」が読み手である同時代人の「日常的な言語意識」に影響を与えている、と考えられるからである。⁵⁰⁾ また、言語意識は、メタ言語的知識の種類によっても 3 つのレベルに分類できる。それは、「言語の構成単位のレベル」 (言語体系に関する知識)、「コミュニケーション実行のレベル」 (言語や言語変種の使用に関する語用論的な知識)、「アイデンティティ構成のレベル」 (言語の社会シンボル機能に関する知識) である。これらは、Kilian が提示した歴史会話研究のための 3 つの次元に照らし合わせて、それぞれ、「言語構造の次元」、「語用論の次元」、「社会言語学の次元」と言

図表 4：言語意識のマトリクス⁵¹⁾

	メタ言語的付随意識	日常的な言語意識	学問的な言語意識
言語構造に関する知識			
語用論的な知識			
社会言語学的な知識			

49) Vgl. Scharloth (2005) S.14.

50) Vgl. Mattheier (1998) S.22.

51) Vgl. Scharloth (2005) S.12ff.

い換えることができるだろう。言語使用史や言語接触史で扱われる言語変種が、それぞれの時代にどのように評価されていたのかは、時代ごとの言語意識を調査することによって初めて明らかになる（どのような言語使用が「良い」「市民的」と思われていたのか、外来語はどのようなものとして受け入れられていたのか、など）。このように、言語意識史もまた、他の「外的」語史と不可分の関係にある。

4. 資料批判

これまで社会語用論的語史研究における諸分野について考察してきたが、いずれの分野における研究においても、研究対象となるのは歴史上のある時点で書かれ／印刷されたテキストか、録音された音声である。こうした資料に関して、Kilian (2002) は、現代における語史研究に際しては史学の分野で行われているような十分な資料批判がまだ行われていない、と指摘している。⁵²⁾

Kilianは、史学的な資料の分類カテゴリーに基づきながら、語史研究のためのマクロ・カテゴリーを提案している（図表5参照）。それによれば、資料はまず研究者のアプローチの仕方によって、「遺物 (Überrestquellen)」と「報告・伝承 (Traditionsquellen)」とに分類される。「遺物」は資料の作り手の意図とは無関係に扱われる資料であり（19世紀の書きことばを知るための資料として当時書かれた日記を研究する場合など：a）、「報告・伝承」は作り手の意図に沿って扱われる資料である（19世紀の語彙を知るための資料として当時出版された辞書を研究する場合など：b）。この分類は、したがって流動的なものであり、同一のテキストが研究ごと

52) Vgl. Kilian, Jörg (2002) : Scherbengericht. Zu Quellenkunde und Quellenkritik der Sprachgeschichte. In: Cherubim, Dieter u.a. (Hg.) : Neue deutsche Sprachgeschichte. Berlin/ New York: de Gruyter, 139-165. S.139f.

に「遺物」に分類されたり「報告・伝承」に分類されたりする。また、資料はさらに、資料によって伝えられる出来事の当事者・同時代人が作った一次資料（日記やルポルタージュなど）と、当事者・同時代人以外によって作られた二次資料（現代に編纂された中高ドイツ語の辞書など）とに分類される。⁵³⁾

図表 5：資料批判のためのマクロ・カテゴリー

	遺 物	報告・伝承
一 次 資 料	(a)	(b)
二 次 資 料	(c)	(c)

このマクロ・カテゴリーは、研究対象や研究方法ごとに修正される必要がある。Kilian (2002) では一例として、歴史上の口頭発話を再構成するためのマクロ・カテゴリーが示されている。そこでは、「遺物」は「言語運用の断片 (Performanzfragment)」、「報告・伝承」は「言語運用の記録 (Performanzarchiv)」に置き換えられている。⁵⁴⁾ 新聞の言語を分析する際のマクロ・カテゴリーとしては、「遺物」は「新聞記事」、「報告・伝承」は「新聞の言語に関する記録」(日記、エッセイなど)などに置き換えられるだろう。

また、資料によって伝えられる出来事を扱う史学に対し、語史研究では出来事を伝えている言語そのものも研究対象となるため、より精密な分類が要求されている。語史研究のためのさらなるカテゴリーとしては、「時間」、「空間」、「資料の作り手」、「テキスト種」、「伝達形式」などが挙げられている (19世紀に刊行されていたライブツィヒの週刊紙『イラスト紙』における記事を一例として分類してみると、「1843年7月第1週」、

53) Vgl. Kilian (2002) S.144ff. このカテゴリーの作成にあたり、Kilianは、Johan Gustav Droysen (1808-1884) の分類と、それを簡略化したErnst Bernheim (1850-1942) の分類を援用している。

54) Vgl. Kilian (2002) S.152.

「ライブツイヒ」、「匿名の新聞記者」、「報道文」、「マスメディア」となる)。このうち「テキスト種」に関しては、さらに、「題材」、「表現形式」、「(資料が作られた当初の) 目的」ごとに分類する必要がある。⁵⁵⁾ 一方、Mattheier (1998) では、「テキスト種」の別の分類方法が示されている(図表 6 参照)。

図表 6：テキスト種の分類カテゴリー

	情報提供機能	アピール機能	接触機能
実用テキスト	(a)	(b)	(c)
専門・学問テキスト	(d)	(e)	(f)
文学テキスト	(g)	(h)	(i)

このカテゴリーでは、テキストは扱われるテーマごとに、「実用テキスト」、「専門・学術テキスト」、「文学テキスト」に分類され、一方ではそのコミュニケーション機能ごとに「情報提供機能をもつテキスト種 (informierende Textsorten)」、「アピール機能をもつテキスト種 (appelierende Textsorten)」、「接触機能をもつテキスト種 (kontaktierende Textsorten)」に分類される。この場合、たとえば新聞記事は「情報提供機能をもつ実用テキスト」(a)、機械の取り扱い説明書は「アピール機能をもつ専門テキスト」(e)にあたる。⁵⁶⁾

そして、こうしたマイクロなカテゴリーもまた、扱われる対象やアプローチの仕方に応じて修正していかなければならない。たとえば、インタビュー記事や議事録などの「(文章として書きおこされた) 口頭発話」を扱う際には、それらの資料においてどれだけ口頭発話が忠実に再現され

55) Vgl. Kilian (2002) S.146f.

56) Vgl. Mattheier (1998) S.28f. Mattheier は「接触機能をもつテキスト」の例を挙げていない。Heinz-Helmut Lüger (1995) によれば、印刷物のタイトルや新聞記事の見出しなどがこのカテゴリーに分類される。Vgl. Lüger, Heinz-Helmut (1995): Pressesprache. 2. Aufl. Tübingen: Niemeyer. Kap.4.1.

ているのかという度合い、つまり真正性 (Authentizität) ごとにも分類する必要がある。⁵⁷⁾

5. おわりに

言語の変遷を社会コミュニケーションの一部として扱う「社会語用論的な」語史研究の分野では、相補関係にあるさまざまな下位分野が存在しており、ひとつの研究対象を複数の分野から多角的にアプローチすることができる(新聞の言語を、「内的」語史やジャーナリストの言語使用史、新聞批判に関する言語意識史という視点から考察するなど)。そうした研究によって、これまで触れられることがなかった言語現象に光が当てられたり、あるいは、これまで一面的に語られてきた定説が覆されたり、より一層深く言語の歴史が明らかにされていくことだろう。

しかし、冒頭に記したような古代においては、言語を後世に残るような形で、つまり書きことばとして使用できたのはごく限られた社会集団(王侯貴族や祭司など)だけである。この点から、社会語用論的語史研究がその真価を発揮できるのは、幅広い社会層に書きことばが浸透し、さまざまなコミュニケーションが資料として残されている時代、具体的に言えば近代以降を対象とした場合だと言える。中でもとりわけ、19世紀中期以降からマスメディアにまで発展した新聞のドイツ語に関しては、コーパスを形成するのに十分な量の一次資料が存在しており、またその言語の同時代人に対する影響力はきわめて大きかったと想定されているにも関わらず、いまだに体系的な研究は行われていない。⁵⁸⁾ この時代の新

57) Vgl. Kilian (2002) S.151.

58) Vgl. Püschel, Ulrich (1998): Zeitungsstil und Öffentlichkeitssprache. In: Cherubim, Dieter (Hg.): Sprache und bürgerliche Nation. Berlin/ New York: de Gruyter, 360-383. S.360ff.

聞のドイツ語を「社会語用論的な」視点から研究することは、語史研究の分野における大きな課題のひとつである。

参考文献

- Cherubim, Dieter (1984) : Sprachgeschichte im Zeichen der linguistischen Pragmatik. In: Steger, Hugo/ Wiegand, Herbert Ernst (Hg.) : Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Sprachgeschichte. Bd.2.1. Berlin/ New York: de Gruyter, 802-815.
- Cherubim, Dieter (1998) : Sprachgeschichte im Zeichen der linguistischen Pragmatik. In: Steger, Hugo/ Wiegand, Herbert Ernst (Hg.) : Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Sprachgeschichte. Bd.2.1 2. Aufl. Berlin/ New York: de Gruyter, 538-550.
- Coseriu, Eugenio (1973) : Einführung in die strukturelle Betrachtung des Wortschatzes. 2. Aufl. Tübingen: Narr.
- Eggers, Hans (1963) : Deutsche Sprachgeschichte. Bd.1. Hamburg: Rowohlt.
- Elspaß, Stephan (2005) : Sprachgeschichte von unten. Untersuchungen zum geschriebenen Alltagsdeutsch im 19. Jahrhundert. Tübingen: Niemeyer.
- 藤井明彦 (1990) : 「初期新高ドイツ語期の印刷術と印刷業者—A. Schirokauerの『遺産』をめぐって—」日本独文学会『ドイツ文学』84号、22-38.
- Hermanns, Fritz (1995) : Sprachgeschichte als Mentalitätsgeschichte. In: Gardt, Andreas (Hg.) : Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen. Tübingen: Niemeyer, 69-101.
- Hosokawa, Hirofumi (2008) : Das „Zeitungsdeutsch“ aus der Sicht Arthur Schopenhauers —Eine soziolinguistische Betrachtung seines Sprachbewusstseins.— In: Neue Beiträge zur Germanistik 136, Japanische Gesellschaft für Germanistik. S.100-112.
- Kilian, Jörg (2002) : Scherbengericht. Zu Quellenkunde und Quellenkritik

- der Sprachgeschichte. In: Cherubim, Dieter u.a. (Hg.): Neue deutsche Sprachgeschichte. Berlin/ New York: de Gruyter, 139 - 165.
- Kilian, Jörg (2005) : Historische Dialogforschung. Tübingen: Niemeyer.
- Koch, Peter/ Oesterreicher, Wulf (1994) : Schriftlichkeit und Sprache. In: Steger, Hugo/ Wiegand, Herbert Ernst (Hg.): Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Schrift und Schriftlichkeit. Berlin/ New York: de Gruyter, 587 - 604.
- Koszyk, Kurt (1966) : Deutsche Presse im 19. Jahrhundert. Berlin: Colloquium.
- Linke, Angelika (1996) : Sprachkultur und Bürgertum. Zur Mentalitätsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Stuttgart/ Weimar: Metzler.
- Lüger, Heinz-Helmut (1995) : Pressesprache. 2. Aufl. Tübingen: Niemeyer.
- Mattheier, Klaus J. (1998) : Kommunikationsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Überlegungen zum Forschungsstand und zu Perspektiven der Forschungsentwicklung. In: Cherubim, Dieter u.a. (Hg.): Sprache und bürgerliche Nation. Berlin/ New York. de Gruyter, 1 - 45.
- Mattheier, Klaus J. (1999) : Sprachhistoriker als Soziologen. Über sprachwissenschaftliche Versuche zur Strukturierung sozialer Gemeinschaften. In: Gardt, A./ Haß-Zumkehr, U./ Roelcke, T. (Hg.): Sprachgeschichte als Kulturgeschichte. Berlin/ New York: de Gruyter, 11 - 18.
- 新田春夫 (1990) : 「多様性と規範性—初期新高ドイツ語時代の社会状況と言語意識—」日本独文学会『ドイツ文学』84号、11 - 21.
- Polenz, Peter von (1999) : Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Bd.3. Berlin/ New York: de Gruyter.
- Polenz, Peter von (2000) : Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Bd. 1. 2. Aufl. Berlin/ New York: de Gruyter.
- Püschel, Ulrich (1998) : Zeitungsstil und Öffentlichkeitssprache. In: Cherubim, Dieter (Hg.) : Sprache und bürgerliche Nation. Berlin/ New

- York: de Gruyter, 360-383.
- Scharloth, Joachim (2005) : Sprachnormen und Mentalitäten. Sprachbewusstseinsgeschichte in Deutschland im Zeitraum von 1766 und 1785. Tübingen: Niemeyer.
- Schmidt, Wilhelm (1996) : Geschichte der deutschen Sprache. 7. Aufl. Stuttgart/ Leipzig: Hirzel.
- Schwitalla, Johannes (2006) : Gesprochenes Deutsch. 3. Aufl. Berlin: Erich Schmidt.
- Straßner, Erich (1999) : Zeitung. 2. Aufl. Tübingen: Niemeyer.
- 高田博行 (2007) : 「歴史語用論の可能性—甦るかつての言語的日常」『月刊言語』12月号、68-75.
- Wuttke, Heinrich (1875) : Die deutschen Zeitschriften und die Entstehung der öffentlichen Meinung. 3. Aufl. Leipzig: Krüger.

Was ist „soziopragmatische Sprachgeschichtsforschung“?

Überlegungen zur Geschichte der Sprache als sozialer Kommunikation

Hirofumi Hosokawa

Diese Arbeit befasst sich mit der Bedeutung und dem gegenwärtigen Forschungsstand der so genannten „soziopragmatischen Sprachgeschichtsforschung“, die durch die Veröffentlichung von Peter von Polenz' „Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart“ (1991 - 1999) ins Blickfeld der historischen Sprachwissenschaft geraten ist. Nach von Polenz (2000) muss der historische Wandel der Sprache nicht nur aus soziolinguistischer, sondern auch aus pragmatischer Sicht beschrieben werden. Die soziopragmatische Beschreibung der Sprachgeschichte wird demnach überhaupt erst möglich, nachdem man den konkreten historischen Gebrauch der Sprache in bestimmten sozialen Schichten und Gemeinschaften sowie die Geschichte der Sprachhandlungen in den verschiedenartigsten kommunikativen Situationen erforscht hat.

Während sich die traditionelle Sprachgeschichtsforschung auch heute noch im wesentlichen auf die Beschreibung der Veränderungen im Sprachsystem selbst wie etwa den Wortschatz oder die Grammatik beschränkt, wird in jüngeren sprachhistorischen Arbeiten zunehmend auch die soziopragmatische, so genannte „äußere“ Geschichte der deutschen Sprache thematisiert; d.h. hier wird der historische Wandel der Sprache unter dem Aspekt der Alltags-, Bildungs- und Mentalitätsgeschichte

beschrieben. Klaus J. Mattheier (1998) unterteilt diese „äußere“ Sprachgeschichte, d.h. also die Geschichte der sozialen und mentalen Veränderungen, die das Sprachsystem beeinflussen, in drei Kategorien:

- (1) Sprachgebrauchsgeschichte: Unter diesem Aspekt wird der konkrete Sprachgebrauch im Zusammenhang mit dem historischen Wandel der sozialen Umstände spezifischer Kommunikationssituationen (Stadtsprache, Arbeitersprache, Literatursprache etc.) untersucht.
- (2) Sprachkontaktgeschichte: Hier werden beispielsweise Kontakte zwischen verschiedenen Sprachen im so genannten Sprachgrenzbereich, also in gemischtsprachlichen Gebieten, untersucht; weiter fallen unter diesen Aspekt z.B. nichtdeutsche Sprachminderheiten in Deutschland oder der so genannte Sprachpurismus.
- (3) Sprachbewusstseinsgeschichte: Unter diesem Aspekt werden u.a. die zeitgenössische Reflexion in Bezug auf die Sprache, d.h. die professionelle Reflexion der Grammatiker über die Sprachnorm, sowie die Sprachmentalität, also das alltägliche Sprachbewusstsein der Bürger, behandelt.

Die soziolinguistische Sprachgeschichtsbeschreibung wird noch durch einige weitere Forschungsbereiche ergänzt. So hat etwa die historische Soziolinguistik nach Stephan Elspaß (2005) die „sozialgeschichtliche Fundierung von Sprachgeschichtsforschung“ zum Ziel. In Bezug auf den pragmatischen Aspekt der soziopragmatischen Sprachgeschichtsforschung lassen sich die Forschungsbeiträge aus dem Bereich der historischen Pragmatik nennen, die den historischen Wandel einzelner Sprachhandlungen untersucht; ein Beispiel wäre etwa die historische Dialogforschung von Jörg Kilian (2005).

Diesen Sprachgeschichtsbeschreibungen mangelt es nach Kilian (2002) jedoch immer noch an hinreichender Quellenkunde und Quellenkritik. Er

fordert deswegen die Ordnung und Bewertung der historischen sprachlichen Quellen, für deren Klassifikation er konkrete Vorschläge macht.

Zur systematischen Erforschung der soziopragmatischen Sprachgeschichte sind notwendigerweise Untersuchungen in einer Reihe von anderen, benachbarten Forschungsbereichen erforderlich. Als geeignetstes Analyseobjekt all dieser Forschungen gilt die Sprache der Neuzeit, da seit Beginn der Neuzeit die Sprache der verschiedensten sozialen Schichten in Schrift und Druck festgehalten und verbreitet wurde und sich vor diesem Hintergrund ein komplexes Geflecht an vielfältigen Kommunikationssituationen ausdifferenzieren konnte.